

第三章 オリーブ葉エキスの治療効果物質

一八〇八年から一八一三年にかけてのスペインとフランスの戦争の中で前線のスペインの医者は秘密兵器の登場に匹敵する一つの発見をした。彼らはオリーブの実の粉末から苦い緑色の飲み物をつくり高熱に苦しむ傷病兵に治療薬として与えた。これは摂氏四〇度の危険な高熱から摂氏約三八・二度以下の安全な体温に体温を下げた。このようにして発熱したスペイン兵は早く再び戦線に復帰することができフランス兵を撃退した。

この再攻撃を見ていたフランス軍の治療班は一八一一年にはスパイをスペイン側に送り込んだ。フランス軍の軍医たちはスペインの軍隊の中でどんなことが起きているのかを知りたがった。この医学上の秘密を知ったフランス軍の軍医将校は同じ緑色のオリーブの葉の粉末の飲み物を解熱剤の一つとして使った。この飲み物は効果的だったのでフランス軍ではそれまで標準的な解熱剤として使っていたキナの樹の皮に代えてオリーブ葉の濃縮物を使うようになった。

一八一一年スペインに従軍したフランス外征軍の大佐で医学博士のE・パラスはオリーブ葉

の飲み物の中の有効成分を分析し、三か所の別々のところで自分の発見を発表した。

一八二七年の著書では戦場での体験を書き、翌年には医学雑誌に論文を発表、さらにその翌年には回想録を書いた。そしてどの著作でもオリーブ葉と若い樹皮にはそれほど重要ではない他の成分とともに結晶化される物質が含まれているとして、これを自分でボークエリンと名付けた。これは苦い物質で彼はオリーブの樹の製剤の中の解熱効果の多くはこの成分にあるとした。

「ボークエリン」はパラス博士によれば無色無臭の固体で少し変な味がするものなのであった。これはシリカの雲母のように雲母状に板に結晶し、時には星型のプリズム的な結晶になるもので、どんな湿度の水にも非常に溶け易い性質を持っている。冷たいアルコールには溶けにくい、沸騰したアルコールには容易に解ける溶液が冷えるにつれて沈澱する。

この水溶液は赤い色のリトマス試験紙を淡い青色にする。

パラス博士は次のように書いている。

「オリーブの葉にある種の治療薬としての価値があることはライラック、トネリコといった同じ部類に属する植物に解熱効果があり、欧州大陸の一部の地域ではその目的で使われているという事実によっても裏付けられる。」

しかし、パラス博士の発見は最近まで通常の対症療法の医学の中ではずっと無視されてきた。だがオリーブ葉のエキスの解熱効果はこれが持つ治療効果の中では小さな効果のひとつに

過ぎない（とはいえこれも重要な働きではある）

オリーブ葉の中のこれらの成分は全ての種類の病気の予防と治療に効果的であるだけでなく完全に安全なものである。生化学者たちはこれらの成分は純粋な水を飲むのと同様に安全なものとしている。毒性が極めて低く事実上測定もできないからである。

オリーブ葉エキスの中の有効成分の安全性

粉末にしたオリーブ葉エキスの中に近年発見されたファイトケミカル（植物有効成分）は毒性試験もされていて研究所の動物にも何千人もの人間の利用者にもマイナスの副作用は起きていない。

緑色のオリーブの樹の葉の中にある苦いグルコシド（グルコース配糖体）、オレユーロペンには感染症、退化病の両方に効果のあることが新しく発見された幾つかの価値ある物質が含まれている。オレユーロペン（ $C_{25}H_{32}O_{13}$ ）の経験的な処方方はこれをイリドイド・グループの仲間にして来た。これはD-グルコースの形の炭水化物を含むユニークな化学構造を持つグループである。

自然の中に最初に発見されたイリドイドはベルベナリンで一八三五年に早くも分離されている。しかしこのグループの構造の研究は一九六三年まで始まらなかった。これはイリドイド

類はきわめて不安定な物質でこのグループの一つの物質は他の物質に変わる特質を持っているといった具合だからだった。そしてこれがイリドイドのオレユーロペンの中の物質にユニークな治療上の効果を付与する生化学上の特質になっている。

オレユーロペンの毒性試験ではネズミでの実験で七日間、体重一キログラム当たりで一グラムを与えるという大量投与がされた。しかし、これだけの量でも毒性は現れなかった。事実オリーブ葉の抽出物の中のオレユーロペンはあまりにも安全であるがゆえに致死量五〇（LD50）ばかりか有害投与量といったものさえつかむことができなかった。（LD50）とはその物質を与えた時に全部の実験動物の五〇％が死ぬと考えられる量のことである。

オレユーロペンを加水分解してできる一つの物質であるエレノール酸が全ての病原性微生物を殺したり増殖を抑えたりする主な物質だということが科学的な研究を通じてわかったのはごく最近である。またもう一つの加水分解の産物アグリコン（配糖体の加水分解で得られる糖以外の物質）もエレノール酸の対微生物効果を助ける。オレユーロペンに含まれる物質は第一〇章の表（7）に示すように人間にとって有害な多くの微生物に対して効果的に効く。

一九六九年にもどってアップジョン社はエレノール酸由来のカルシウム物質、エレノール酸カルシウムの正確な毒性を調べる実験を行った。エレノール酸カルシウムは一つの塩で顕微鏡レベルの全ての微生物を殺す能力を持った強力な抗微生物物質である。毒性試験は研究所でネズミ、犬、鶏、兎で行なった。以下は一九七〇年に発表された毒性試験のレポートである。

——エレノール酸カルシウムのオリブは経口的に一回に与える量としておよそ体重一キログラム当たりでラットの場合で一七〇〇ミリグラム（一・七グラム）だった（きわめて安全で無害ということになる）。腹腔内に与える場合オリブはラットで体重一キログラムあたり一六〇ミリグラム、マウスで一二〇ミリグラムだった（ともにきわめて安全で無害ということになる）。三〇日間、一日あたり体重一キログラム当たりでラットに三〇、一〇〇、三〇〇ミリグラムを経口的に与えても問題はなかった（きわめて安全で無害ということになる）。

一か月間、犬に体重一キログラム当たりで三、一〇、三〇ミリグラムを与えても問題はなく（安全で無害）、一番多く与えた時に胃に軽度な炎症が起きた程度だった。一%と二%の水溶液を一日に三回、鶏に鼻から注入した場合には二日後に鼻汁が出たり、鼻介骨の上皮や固有層に変化が起きたりした。嗅覚器官の上皮の変化は呼吸器官のそれより目立った（安全で無害）。〇・六%の水溶液を同じように鼻から滴下して注入した時に兎にも同様な変化が起きたが鶏の場合よりも変化は軽度だった。これは一日に四回、一四日間続けたものである。（安全で無害）。〇・一%と〇・三%の水溶液を与えて七日後の兎の組織学上の変化は対照群の兎の場合と比べて認められなかった。しかし〇・三%の水溶液を一四日間与えた時には軽度な炎症が見られた（安全で無害）。人間の鼻腔内の上皮のつき方や上皮でおおわれている場所全体の違いといったことから見て兎の鼻腔は人間の場合よりも敏感だろうと思われる。

三人の研究者の共同執筆のこのレポートは結論として人間のボランティア（志願者）で

やった毒性試験の結果も述べている。そして人間はエレノール酸カルシウムをスプレーで鼻の粘膜に吹き付けるのに何の問題もなく、この種の鼻のスプレーはきわめて安全でかつ無害で〇・〇〇八五%から二%までのいろいろな濃度のものが全て問題を起こさなかったと書いている。たとえば一%の溶液を一日四回与えてもきわめて安全で無害で一四日間与え続けて何の問題もなかった。これは人間の鼻の粘膜は兎より敏感でなく防衛反応も兎より起きにくいからだという。このことは普通の風邪やインフルエンザで鼻づまりを起こしている人向きに医者の方箋なしで店頭で手軽に買える鼻スプレーをオリブ葉のエキスを造れば便利だということを示している。第九章「ふつうの風邪やインフルエンザに即効」参照。

エレノール酸やエレノール酸カルシウムをたとえば病原性バシラス菌Tタイプといった比較的稀な細菌の培養器に加えた場合にはこれを抑える。また真菌類、ほとんど全てのウイルス、一部のバクテリアにも、さらにほとんど全ての院内感染に関係している黄色ブドウ球菌の分泌する毒性のあるタンパク質にも同じ効果を發揮する。

黄色ブドウ球菌による院内感染も防げる

ノースウエスタン大医学部の助教授G・A・ノースキン博士はかなりひどい胸の痛みと低血圧で同大学病院に入院した五五歳の男性患者について報告している。この人は急性の心筋梗塞と